

土壌群を伴う竪穴状区画について

— 台地整形区画に関連して —

伊藤 智 樹

1. はじめに

発掘調査によって発見される遺構や遺物の成果によって新しい知見が日々提示されつつあることは周知のとおりである。この傾向は千葉県内に限らず全国的なものであり、毎日の新聞紙上では発掘ニュース等が紙面をにぎわせている。それらは、歴史上の新事実や学史の上での重要な発見につながるものが多く、考古学や古代史、歴史学に興味や感心を抱かせる好資料となっている。一方、こうした華やかさとは別に、遺構や遺物の性格が不明確なまま報告せざるを得ないような調査例も数えきれなく存在している。考古学の研究者に限らず、日々発掘調査に携わる多くの研究者が不明確な諸問題のひとつひとつを解き明かす努力をおこなっている訳ではないが、大地に残された遺構や遺物は、その糸口すら見せてくれない場合が多い。小稿で取り上げた遺構もこうした中のひとつであり、最近各地で報告されている類例をもとにしていくつかの糸口を見出してみたい。

2. 遺構の特徴と検出例

さて、表題に記した「土壌群を伴う竪穴状区画」とはどういう遺構であるのか、その遺構の特徴を現在発掘中の千葉市中野台遺跡の例をもとに列記する。(第1図)

①区画検出時の上面プランの状況——暗褐色土にロームブロックが混入した覆土が長方形、楕円形、不整形な広がりを見せ、いくつかの遺構が重複しているようにみえる。上面での観察では遺構がどういう状況で重複しているのか不明瞭である。

②区画の規模——長軸の長さが10m前後の区画から50mを超える区画も存在している。区画そのものの深さは10cm前後から1.5m前後である。

③区画及び区画内の遺構——区画の掘り方は、立ち上がり明瞭になるものと自然傾斜のようになるものがある。長軸の長さが50mを超える区画

は区画の外縁に沿って小溝が検出されている。掘り込みの浅い区画は明瞭な壁はないが覆土にロームブロックを多く混入しており明らかに人為的な整形がされている。区画内には正方形、長方形、楕円形、円形、不整形の土壌が不規則な配置で存在しており、地下式土壌が伴っている。また、土壌内および区画内に小ピットが多数認められるが、このピットの配列も掘立柱建物跡のような規則性は認められない。土壌の掘り込み面は不明瞭で、区画内に取り込まれるものがほとんどである。また、ピット、土壌ごとの重複は少なく、区画の掘り方の傾斜面から底面に掘り込まれている。区画の底面は平坦でしまりがあがる。

④出土遺物——調査中のため個々の遺物についての詳述はできないが、遺物の多くは中・近世の陶・磁器片、古銭である。また覆土中に、ハマグリ、シオフキなどの貝殻が混入している土壌も認められる。

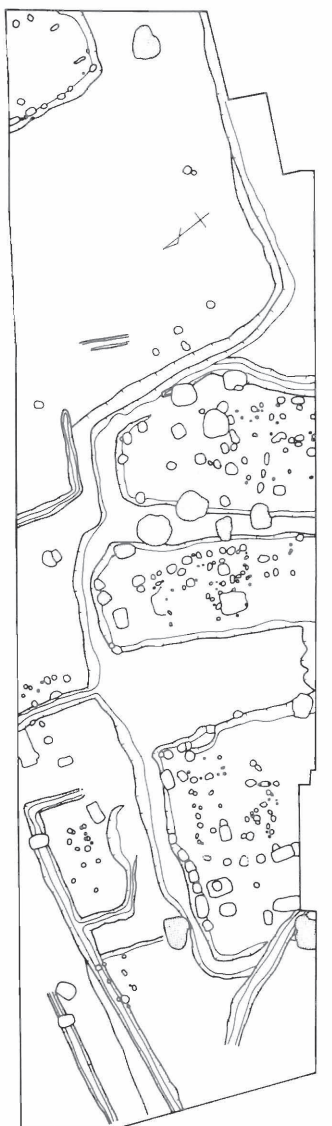
以上が中野台遺跡における竪穴状区画遺構の特徴であるが、このような特徴をもつ遺構が県内でも少数ながら検出されている。次にその類例について概略する。

千葉市西屋敷遺跡⁽¹⁾(第2図-1)

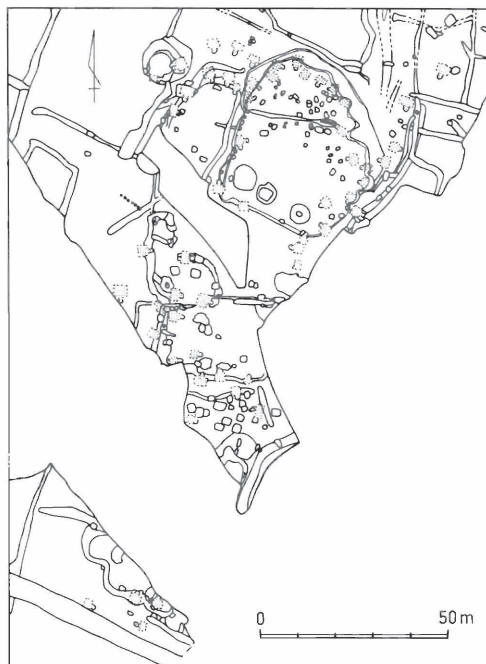
西屋敷遺跡では台地整形区画として報告されている。区画遺構と土壌群が最も顕著に検出された遺跡である。ここでは、東西約70mのほぼ方形の台地整形区画の内部が3つの小区画に分けられ、大区画の外縁では幅1.5~2mの回廊状遺構が全周している。小区画は道路状遺構によって区画され、各小区画の内縁に沿って小溝が認められる。区画内で検出された土壌の総数は229基である。土壌の多くは長径1m前後の規模をもつものであるが2mを超える大型の方形、長方形の土壌も検出されており、地下式土壌9基も存在している。これらのうち、底面にあるいは壁面に粘土が敷き詰められるもの4基、焼土、炭化物の遺存するもの2基、



第1図 千葉市中野台遺跡における中・近世遺構配置図



1) 千葉市西屋敷遺跡



2) 市原市台遺跡



3) 成田市烏内遺跡

※各遺跡のスクリーントーンは地下式土壌を示す。

第2図 各遺跡における土壌群を伴う区画遺構（縮尺は不同）

人骨を埋葬したものの7基がある。土壌は不規則に配列しているようだが、地下式土壌を含め、大型の土壌が区画の外縁に沿って掘り込まれ、小型のピットを含めた土壌がその内側に多く認められている。特に第一区画ではその傾向が強く認められる。

遺構から出土した遺物は、古瀬戸、常滑、美濃・瀬戸等の陶・磁器類、「皇宋通寶」「永樂通寶」などの渡来銭や「寛永通寶」などの和銭、キセル、銅製品、鉄製品の他、松樹双雀を表わした和鏡等がある。これらの遺物を区画ごとにみると土壌群の多い第一区画と第二区画にまとまる傾向が認められている。またこの他、土壌内から自然石や貝が出土していることも興味深い。

成田市鳥内遺跡⁽²⁾ (第2図-3)

鳥内遺跡では、台地の縁辺部を長方形に近い形でローム層を50-90cm掘り込み区画を設けている。谷側では地形に沿って自然傾斜になっていく。区画の底面は平坦で、覆土は耕作土とローム粒が混ざり合った状況である。区画の遺構は、縁辺部に地下式土壌が2基の他、円形、方形の土壌があり、ピットが検出されており、土壌底面にピットが検出されている例もある。地下式土壌を含めた土壌の数は44基である。

区画内からの出土遺物は土師質皿形土器、陶、磁器類、キセル等が出土している。中でも区画内316号跡からは合子状に合わされた2枚1組の皿形土器が5組10枚、5ヵ所に置かれた状況で出土している。また328号-A、B、F号跡でも1組ずつの皿形土器が、317号跡でも2枚1組の皿形土器が出土している。なお土壌の中には西屋敷遺跡でみられたような底面や壁面に粘土を敷きつめた例が5基認められている。

千葉市武石遺跡⁽³⁾

武石遺跡では南北約20m、東西約30mの区画の中に土壌が30基以上検出されている。調査者はこの区画を「人為的に削減された凹部」と呼称している。区画の形状は全体的には不明瞭であるが楕円形に近い形状をとると考えられている。区画は中央部で最も窪んでおり、深さ60cm程である。この中央の凹部にかけてゆるやかに傾斜し、全体では断面がなだらかな椀状を呈している。土壌の平面形は方形、長方形、矩形であり、他に小ピットが

検出されている。遺物を伴うものは少ないが、平安期と推定される土器を伴う貝層が検出された土壌、焼土、骨片を出土した土壌が存在している。

市原市台遺跡⁽⁴⁾ (第2図-2)

台遺跡では南北120m、東西90m程の範囲に2ヵ所の大きな区画が存在している。1ヵ所は南北45m、東西40m、1ヵ所は南北20m、東西30mの区画で、これらを中心に径10m程の窪地が連結している。大区画の形状は長方形、楕円形に近い形状を呈している。区画とその周辺には56基の地下式土壌と20基以上の土壌が検出されているが、地下式土壌が区画上部と斜面部に集中しているのに対し土壌が区画中央寄りに位置していることに分布の特徴が認められる。

出土している遺物は、古瀬戸、常滑などの陶・磁器類が多い他、板碑の破片、古銭、五輪塔も出土している。また人骨が出された土壌、地下式土壌が認められている。

以上、大規模な区画遺構が認められている4遺跡の概略を述べてきた。少ない類例ではあるがそれぞれに共通点、相異点が認められるようである。次に区画遺構に関する問題点をあげ小稿のまとめとしたい。

まとめ

区画遺構に関する問題点として次の3点が掲げられる。第一点は区画遺構そのものの企画性の有無、第二点は区画内の遺構相互の関連性、第三点として遺構の性格とその年代についての問題。

まず第一点では、西屋敷遺跡の例が好例であろう。ここでは回廊状遺構と道路状遺構、さらに小溝によって3つの小区を設定している。区画の底面は平坦であり、それぞれの区画が1m前後の深さを有している。鳥内遺跡では小区画は無いが長方形の区画をもつことが推定されている。武石遺跡では整然とした区画はないが、台遺跡同様大規模な範囲でローム層を掘り窪めている。それぞれに区画自体の特徴はあるが、広範囲な造成をおこなっていることは明瞭である。このような点からみると4遺跡でみとめられた区画は明らかに企画性をもった遺構として考えられる。⁽⁵⁾

第二点では、武石遺跡を除く3遺跡で共通性が認められた。これは中野台遺跡でも同様である。

すなわち区画内の遺構では、土壌と地下式土壌、小ピットという共通した遺構が認められることである。台遺跡では地下式土壌が圧倒的に多く検出されており、土壌数の多い他の遺跡とは異なる点もあるが、土壌と地下式土壌、小ピットを区画遺構内における共存関係としてとらえることができよう。またそれぞれの区画内における位置も、地下式土壌と長方形、正方形など形の整った土壌が区画周囲とその縁辺にまとまる傾向にあり、小土壌、小ピットが区画中央にまとまる傾向をみせるという共通性が認められている。それぞれの土壌、地下式土壌、小ピットが全体ではあまり規則性のない集合体にみえるが、個々の関連においては何らかの規制のもとに掘り込まれていったものと思われる。西屋敷第一区画縁辺部に認められる長方形土壌や、台遺跡の竪狭入口部を区画内部に向けた地下式土壌の一群はその好例であろう。こうした例は、中野台遺跡でも認められている。

第三点は最も重要な問題である。各遺跡における出土遺物を見ると西屋敷遺跡、台遺跡に豊富な種類の遺物が出土している。古屋敷では、出土した陶・磁器に15世紀から18世紀の中世から近世の特徴が認められ和鏡の年代も15世紀代、古銭の年代も陶・磁器の年代にほぼ一致していることが明らかとなっている。また古屋敷では中世陶器と近世陶器、喫煙具、「寛永通宝」の出土分布に小区画ごとの特徴が認められている。台遺跡では出土した陶・磁器類のうち古瀬戸、常滑から15世紀後葉から16世紀初頭の年代が与えられている。さらに区画内の長方形ピットからは「貞治七年(1368)」「二月」の紀年がある板碑破片が出土しており、区画遺構の開始が14世紀代に遡る可能性も考えられている。鳥内遺跡では土壌内から土師質皿形土器(カワラケ)が出土しているが年代を決定するに足る遺物は少ない。区画内からは近世の陶・磁器が多く出土している。

以上のことから土壌群を伴う区画遺構をおおよそ14世紀から18世紀、中世から近世の遺構として位置づけることが可能である。

では、こうした区画はどんな意図で企画され造り出されたのか。区画内の遺構の概略は前述したとおりであるが、これらの土壌、地下式土壌からは人骨が出土している例が認められている。西屋

敷遺跡では7基の土壌から人骨が出土し、うち男性1体、女性3体の存在が明らかになっている。土壌はいずれも径1m前後の小規模なものである。台遺跡では10基の地下式土壌と数基の土壌から人骨が出土している。台遺跡における地下式土壌については報告者の半田堅三氏により詳細な分類がなされており、墓塚としての性格を与えられている。鳥内遺跡を調査した小林氏は台遺跡、西屋敷遺跡例をもとに「ローム層を掘り込んでこうした区画を設定する行為それ自体、特別の領域を意識していることに他ならないのである」と区画遺構の性格を墓域として考えている。以上のように土壌群を伴う区画遺構の性格は出土遺物との関連から墓域の設定を意識して造営しているものと考えるのが最も妥当であろう。我孫子市鹿島前遺跡では土壌墓群多数とそれを区画するような溝状遺構⁽⁸⁾が検出され、土壌墓群と溝との同時性も指摘されている。溝もある意味からいえば一つの領域を区画する遺構であり、中・近世の墓域の区画には広範な台地整形や溝の設定がなされていたと思われる。各遺跡の類例をもとに区画遺構とそれに伴う土壌群についての概要を触れてみたが、中・近世の問題は遺跡とそれを取りまく歴史的環境のうへでは握られてこそ本来の姿を見出せるものと思われる。今後は残された諸問題をさらに浮きぼりにさせていきたいと考えている。文末になったが、小稿作成にあたり、小林清隆氏、笹生衛氏には有益な教示をいただいた。記して謝意を表わす次第である。(1班 本部)

註

- 1) 矢戸三男・谷 旬他『千葉市西屋敷遺跡』(財)千葉県文化財センター 1979
- 2) 小林清隆『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-成田市鳥内遺跡-』(財)千葉県文化財センター 1985
- 3) 森重彰文他『武石遺跡・武石館調査報告』日本文化財研究所 1977
- 4) 半田堅三「台遺跡A地点の調査」『上総国分寺台調査概報』市原市教育委員会 1978
- 5) これら4遺跡の他に小規模に区画した掘り込み中に土壌墓が検出されている例が最近の当センターの調査遺跡でも認められている。芝山町

上宿遺跡では方形の竪穴状遺構中より大小9基のピットが検出され、墓壇の可能性が考えられている。『主要地方道成田松尾線Ⅳ』(財)千葉県文化財センター 1986

また、酒々井町上本佐倉上宿遺跡では、カワラケを伴出する土壌が区画状の掘り込み中より検出されている。1984年度筆者調査『千葉県文化財センター年報』No.10 1984

- 6) 笹生 衛氏の教示によると最近千葉市有吉北貝塚の調査で台地を整形した区域に地下式土壇、土壇、小ピットが検出されており、本誌第15・16号に報告された中世土壇墓もこれに関連した遺構の可能性があると指摘されている。氏は土壇墓中より出土したカワラケ、和鏡をもとに遺

構の年代を12世紀中頃から13世紀代とする考えを呈示している。

- 7) 半田堅三「本邦地下式壇の類型学的研究」『伊知波良』2 伊知波良刊行会 1979

また江崎 武氏は「中世地下式壇の研究」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部 1985 の中でも半田氏の考えを補強している。なお第1図台遺跡の遺構配置図はこれに依った。

- 8) 岡村真文他『鹿島前遺跡—第3次発掘調査概報—』我孫子市埋蔵文化財小報第5集 我孫子市教育委員会 1981

『鹿島前遺跡—第4次発掘調査概報—』我孫子市埋蔵文化財小報第6集 我孫子市教育委員会 1982



千葉市中野台遺跡における区画遺構検出例(第1図中の北側部分)